



田原・福江の町と水の話

渥美半島は大きな川がないため、豊川用水が開通するまでは人々は飲み水や農業用水の確保に苦しみました。田原出身の児童文学作家・山田もとの小説『水の歌』では、同氏の母をモデルとする女性が、嫁ぎ先の大草地区で水を得るために多くの苦労を重ねる情景が描かれています。

その一方で、比較的水に恵まれた地域もありました。例えば、江戸時代には町が形成されていた田原と福江です。どちらも山から流れる地下水が砂や小石の土壌の下を走っていたことから、井戸から水を得られました。田原の松下駐車場近くにあった井戸からは、約3ヘクタールもの田んぼを潤すことができる水が出たそうです。

水質も良く、田原・福江のどちらでもくみ上げた水を酒造りに使用していたことがありました。福江公園は、明治時代から昭和半ばにかけて、お酒を醸造する工場があった場所です。セントファール・の南側にも昔、

「亀井戸」と呼ばれる井戸があり、茶道に使えるようなきれいな水が出ました。田原と福江に町ができたのは、水質の良い水が確保できたことが大きな要素の一つだったかもしれません。

井戸の水に頼る生活は、1950年代後半から始まる上水道の整備によって終わりを告げました。現在、渥美半島の飲み水のほとんどは、奥三河から豊川用水で来ています。井戸はだいぶ減りましたが、どの地区でも所々に残っており、往時を感じさせてくれます。

なお、田原市博物館では、5月22日(日)までテーマ展ふるさとの歴史「水と海」を開催しています。水と海にちなんだ地域の資料を展示していますので、ぜひお越しください。

(学芸員 木村洋介)



▲現在の福江公園にあった福井造酒場(『渥美郡勢総覧(1935年刊)』より。